

退任のご挨拶

前副会長 小渡 敬
(平和病院)



前会長の稲富洋明先生とは、沖縄県精神科病院協会です仕事をしてきた縁があり、先生が医師会会長に就任された際、県医師会の理事に推薦され医師会活動に携わることになりました。当時の県医師会は、浦添市の沖縄県医療福祉センターの建物の一部を間借りしており、狭い場所で理事会等の会議をしておりました。事務局は足の踏み場もないほど狭隘で、書類や資料は廊下にはみ出している状況でした。当時から県医師会館を建設することが大きな目標の一つでありました。現在、県医師会館は完成し運用されていますが、当時を思うと隔世の感があります。

その後、宮城信雄会長が就任された際に副会長に指名され、身分不相応ながらも重責を担うことになりました。直近の課題としては診療報酬・介護報酬改定の対応、今年策定した沖縄県21世紀ビジョンの医療・保健分野の検証、これからの5年間の県保健医療計画の策定、また琉大に完成したシミュレーションセンターの運用への協力、はたまた TPP 問題等々があり医師会の仕事は多岐に渡りますが、新役員の先生方に引き継ぐことになりました。

退任にあたり、当時の医師会のことを少し振り返りますと、わが国は既にバブルがはじけて不況下にあり、小泉内閣が発足しグローバル経済を掲げ様々な施策が施行されておりました。医療政策については毎年2.2千億円の医療費削減が断行され、医療界は厳しい状況にありました。本県でも行政改革が叫ばれ、沖縄県保健医療福祉事業団の廃止や県立浦添看護学校の廃校問題があり、医師会執行部としてはそれを阻止するために様々な活動をしたことが思い出されます。また当時は助産師不足の問題もあり、これは県立看護大学に助産師学科を併設する形で解決することができました。またその間に、国

が療養病床廃止の政策を打ち出し、県内でも将来医療難民や介護難民がでるといふ大きな社会問題に発展しました。この問題については県と十分な話し合いを重ね、難民がでない範囲の削減幅(約30%)にとどめることができました。精神科身体合併症問題は南部医療センターに病室を併設する形で解決することができました。しかしながら肥満対策や自殺予防、認知症の対応等の問題が充分解決しないまま「活力ある長寿県の復活」や「離島・僻地医療の確保」、「北部医療圏の産婦人科医師の問題」等については、未だに解決していない問題であります。

県医師会の役割は尽きることはないと思いますが、医師会の仕事は医師会員の便益を図ること、同時に県行政機関と連携を図って沖縄県民の医療と保健そして福祉の推進に貢献することであると考えます。それには琉大病院、県立病院、そして民間の医療施設が協力し連携を図ることが重要であると考えます。これからも県医師会が潤滑油となり、これらの機能を果たしてもらいたいと思います。

最後に10年間医師会活動を行えたのも、理事の先生方の協力と、前山城局長をはじめ現在の上原局長ならびに優秀な事務局スタッフのおかげであります。お礼を申し上げます。

～医師会印象記～

宮城会長と玉城副会長の三役で初めて東京に出張したときに新橋で酒を呑み、沖縄の医療のグランドデザインについて3人で口角泡を飛ばして議論していたが、2人とも酒豪でその呑みっぷりに圧倒され、最後には私はひたすら2人から薫陶を受けている状況になっていたことを新橋に行くと思ひ出す。

退任のご挨拶



前常任理事 大山 朝賢
(沖縄メディカル病院 理事長兼院長)

この度北部地区医師会から、久々に石川清和先生（北部地区医師会副会長）が県医師会理事に立候補し見事当選致しましたので、老兵はホッとして消え去ることに致しました。

上田裕一もとぶ野毛病院理事長が、私に県医師会理事になってほしいと依頼してきたのは、私が関西から名護市に移り済んで2年目の平成9年だったと思います。その当時はウチナーンチュでありながら、沖縄の地理に詳しくなかったので、「あと数年まってほしい」と上田先生に返事をしました。平成14年の北部地区医師会の総会で、再び上田理事長から県医師会理事になるよう依頼されました。二つ返事で答えたところ、平成15年4月上田理事長が県医師会の常任理事の任期半ばで交替となりました。

私はもともと医師会は好きではなかったのです。私自身医師会の理解度が低く、医師会は開業医の利益を守る代表とばかり思っていたものですから。しかし自分が40代の後半を過ぎて医療法人に就職したあたりから考え方がかわり、何か役に立てることはないかと逆に思うようになりました。平成15年4月、その当時県医師会の常任理事をされていた上田理事長の仕事をはほぼ全部引き受ける形で理事に就任しました。今思えば、もっと具体的に仕事の内容を聞いてから引き受けるべきでした。上田理事長はシャープな上、私とはキャリアが違う。私がゆく先々で彼の仕事ぶりを知らない人はいません

でした。私は稲富洋明前会長の下で3年、宮城信雄会長の下で6年、計9年になりますが、まとまった仕事らしい仕事が出来たという感触は今もってありません。しかし県医師会理事になってよかったと思うことはたくさんあります。その一つは日本医師会の動きが手にとるようにわかってきたこと、医師会長はじめ理事の方々が与えられた仕事に対し、身を粉にして働いていることを知ったことです。

勤務医やまだ医師会に入会されてない開業をされている先生方は、かつての私のように、医師会は何の役に立つのだろうぐらいの考えしかないと思います。これは自分の環境がなんとなくうまくいっているからだと思います。

しかし、一旦問題が起これば、例えば、医療訴訟やパンデミックな感染症、東北の大震災のような予期せぬことが起こった場合、だれが自分の味方になってくれるか、国や県の援助等はあると思いますが、やはり仲間である医師会が一番頼りになります。

最後になりましたが、これまで私の仕事を支えて頂いた上原貞善局長はじめ事務局の献身的な協力態勢に心から感謝申し上げます。又、宮城会長はじめ皆様のご健勝とご多幸を祈念し、私の退任の弁と致します。

長い間のご協力、ご支援まことにありがとうございました。

退任の挨拶

前理事 當銘 正彦

(沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 副院長)



2008年4月、沖縄県公務員医師会からの代表枠として沖縄県医師会理事会の末席に就かせて頂いた。この人事は、それまで私が努めていた公立久米島病院に、私と入れ替わりで赴任することになった村田謙二先生がその理事職を努めていたので、相互入れ替えのかたちで実現したものであるが、県医師会の右も左も解らない状態で中枢部に紛れ込む羽目となった次第である。今に思い返せば真に不調法な就任であったが、この度の離任に当たり、理事として務めた4年間の足跡を少しばかり顧みてみたい。

以前にも何かの折りに書いた記憶があるが、医師会の役員・理事の業務は尋常ならぬものである。取り分け、会長、副会長、常任理事の3役は、恐らく自分の医業の犠牲は相当に強いられている筈だ。それは医師会本来の役員業務だけでも大変であるが、加えて、医師会として関与する対外的な役目や仕事が凡そ半端ではない。会長に至っては、私的な日常活動は皆無に近いものではないかと推量される程である。年間、約3.5億円の予算を組んで展開される県医師会の事業である。これまで公務員医師会活動については自分なりに一所懸命に取り組んで来た自負もあったが、県医師会活動については全く無知・無関心であっただけに、当初の逡巡は相当に大きいものであった。

それでも理事会の運営は予想に反して紳士的に為されていること、また何よりも心強いのは医師会本部・事務局職員の献身的なサポートであり、戸惑いの連続ではあったが何とか無事4年間を努めることができたのは、事務局に負うところ真に大である。

私の理事としての主たる所掌は、広報委員会

(担当理事)、医療安全および医事紛争処理委員会(副担当理事)、医師会史編纂委員会(副担当理事)の3つであったが、オプションとして日医の勤務委員会に参加する幸運を4年間にわたり務めることができた。その他には対外的な委嘱を受けて沖縄県がん対策協議会の研修部会およびがん対策推進条例策定連絡会議、那覇市地方裁判所委員会、難病対策会議等々の活動に参加させて頂いた。

担当理事として臨んだ広報委員会は、月1回の編集会議で諸般の方針を論議し、決定していく訳であるが、記事や論説の手配・収集、そして点検は相当に手間暇の掛かる作業であり、専属の事務方数名の奮闘無くしては、到底不可能である。加えて、県内二誌(タイムス、新報)に毎週掲載する医療版コラム「命ぐすい、耳ぐすい」と「ドクターのゆんたく、ひんたく」の原稿依頼とその査読も広報委員会の仕事となっており、それだけでも可成りの労力を要求されるものである。幸い読むこと自体は好きな方であり、私個人としては比較的楽しく広報委員活動を行うことができたとの感慨である。

終戦から祖国復帰までの27年間の県医師会活動を編集した「沖縄県医師会史 第1巻」に引き続き、祖国復帰から医師会館建設までの36年間を編集する「第2巻」の医師会史編纂委員会の活動は、私が理事になる約1年前の2007年から始まっており、途中からの便乗という形で私は加わるようになったのだが、友寄英毅先生、中村義清先生のご両人が正副委員長として並々ならぬ精力を傾注されて、「第2巻」は2011年3月に上梓された。この会史編纂に要した5年に亘る歳月は、担当理事である私に

も相当にタフな作業工程であったと回想されるものであるが、第1巻が16年かけて出版されたことに比肩すると、この超人的な効率の良さは友寄、中村両先生の執念にも近い医師会活動への愛着と、それを脇から献身的に支えた事務局職員との二人三脚の賜物である。お陰様でこの間、私も会史編纂作業を通して県医師会の歴史を、随分と詳しく学ぶことができた。

最後に日医勤務委員会の活動へ参加した貴重な体験について述べたい。理事に就任して間もない2008年7月、九州ブロック選出の委員として日医勤務委員会に参加することになった。全国から選出された16人で構成する委員会であるが、本やテレビでその名を馳せる鈴木厚氏や本田宏氏らの齒に衣を着せぬ痛論に先ずは驚いた。また千葉大同窓で同じ呼吸器内科の分野で活躍する獨協大学福田健教授が居られることには安堵もし、大いに勇気づけられた。委員の任期は2年で、新規発足時に医師会長より諮問テーマを貰うことになっているが、初出の2008年に頂いたテーマは「医師の不足、偏在の是正を図るための方策—勤務医の労働環境(過重労働)を改善するために」であり、2期目の2010年には「すべての医師の協働に果たす勤務医の役割」であった。何れも答申書の形で冊子化されてはいるが、日医会員すべてに配布されてはいないので、興味ある方は日医のHPを参照頂きたい。この4年間における勤務委員会の活動を通して感じたことは、病院を中心とした近代医療の進展・拡大と共に、勤務医にとっ

て日医の存在は希薄化する傾向を顕著に示していることである。「何の為に医師会に入るのか」、このアプリアリな質問に答えるべき有効な「解」を見いだせないのが、現代の若い勤務医の大半であろう。返す言葉が「医師損害賠償保険は医師会の所管する保険の方が有利」だからと勧誘するのは、余りにも侘びしい。2度の答申を作成するに当たり、医師会のあり方と勤務医の参画について繰り返し意見交換を行い、そして答申書として纏めてきたのであるが、現実と目標(すべての医師が医師会に結集する)とのギャップの大きさに、戸惑いは尽きぬものである。

今回、県医師会の理事を離任することになったが、公務員医師を続ける限り、勤務医としての医師会活動のあり方について、私の模索する旅はこれからも続くであろう。

2010年、全国勤務医連絡協議会・宇都宮大会の特別講演で、愛媛大学医療情報部の石原謙氏が言っている。「2000年、WHOは190カ国の医療調査を行い、日本が世界一と評価をしたが、これはマクロの成功とミクロの犠牲という二重構造で日本の医療は成り立っている」からだ。この「ミクロの犠牲」、それは医療提供者側の過酷な勤務実態であり、その最たるものが勤務医の現状であろう。日医が、そして県医師会が何処までその状況を掬い上げる事ができるかという視点こそが肝要であり、これを医師会活動の眼目として中心課題に据えるパラダイムシフトが無い限り、勤務医の医師会離れに歯止めをかけることはできないものと痛感している。

